人間のなかのX

遠藤周作

人間のなかのX

藤周作

中央公論社

人間のなかのX

八五〇円

©一九七八

昭和五十三年七月十五日初版印刷
昭和五十三年七月二十五日初版発行

著者　遠藤周作

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　大口製本

発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
電話　五六八一-五九二一
振替　東京一-三四
検印廃止

目

次

人間のなかのX
人間のなかのX　9
信長と西洋　20
フロイス『日本史』第一巻　39
偽りの宗教使節　48
切支丹大名蒲生氏郷の生涯　57
石仏の里　国東　68
五日間の韓国旅行　80
＊
〈対談〉小西行長をめぐって　豊田武　遠藤周作　91

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

彼等と西洋
彼等と西洋　111
西洋人　116
米国で私のわからなかったこと　122
救いと文学と
基督教文学について　135
次々と友人が受洗するのを見て　139
＊
〈対談〉埋もれ火のような信仰　山本健吉
—正宗白鳥論　遠藤周作　145
〈対談〉救いと文学と　高橋たか子
遠藤周作　157

鏡をみると
鏡をみると 177
新たな決意 179
本のこと 189
日記から 192
娘思いの父親 196
山本さんのこと 200
対談について 203
あとがき 207

人間のなかのX

人間のなかのX

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

人間のなかのX

遣欧使節、支倉常長のことを取材するためメキシコに出かけた。計画していた仕事は政治の犠牲者ともいうべき、この悲劇的な人物の伝記ではなく、彼の生涯を踏台にして小説を書くことだった。勿論、そのために日本人として最初に太平洋を渡ったこの男の足跡をメキシコで調べる必要があった。

多数の商人をまじえた支倉一行は一六一三年（慶長十八年）の十月、仙台藩の月ノ浦からサン・フアン・バプチスタ号という帆船で当時のノベスパニャ――つまり今のメキシコに向った。彼等はたびたびの嵐にあいながら翌年の一月下旬、メキシコのアカプルコに到着した。その後の彼等の行動は支倉たちを後にマドリッドからローマに案内した伊太利人のシピオーネ・アマチの「伊達政宗遣使録」が最も詳しく、私も大日本史料に収められているこの貴重な資料に即して常長の足跡を追ったのである。

アマチの記録によるとアカプルコから首都メキシコ市に登った支倉以下、日本人百八十余人は現在もメキシコシティに残っている聖フランシスコ教会のそばの邸を宿所とした。そしてそのうち七十八人の日本人が基督教の洗礼を受けたという。「一行のメキシコ市に入りし時は聖週間（復活祭前一週間のこと）に当りしかば、主の埋葬記念の行列、その他の儀式、人々の宗教に熱心なるを見て、支倉の随員の内、七十八名は洗礼を志願するに至れり。因ってサン・フランシスコ教会にて、盛大なる儀式を以て、之に洗礼を授け、大司教、堅信の礼を行う、貴族中の上級の士、その代父となれり」とアマチは書いている。

このアマチの記録から、多くの支倉常長の研究者は七十八人の日本人が受洗したことを疑っていない。私も最初はそう信じていた一人だった。

ところがここに別の資料があった。それはメキシコに到着したこれら日本人を目撃したメキシコ・インディオの少年の日記である。当時、インディオの貴族の子弟にはスペイン人神父の建てた学校で教育を受ける者がおり、この十六歳のチマルパインという子供も優秀な生徒の一人だったのであろう。彼はメキシコ市に入った日本人を目撃して、いたく興味を覚え、使者衆が馬に乗り、その従者が槍のような長い棒を高くかかげていたと書いている。

私はこの日記を林屋永吉氏の紹介と翻訳とで知ったのだが、その日記の一六一四年四月九日の項に「本日、聖フランシスコ教会で二十名の日本人が洗礼を受けた。管区長神父が彼等の代父をつとめた」と記してある。

この日記はアマチの記述と半ば合致し、半ば食いちがう。合致するのはメキシコに来た日本人たちが聖フランシスコ教会で受洗したという点だが、食いちがうのはその人数である。アマチは使節をふくむ日本人たちの半分以上にあたる七十八人が洗礼を受けたというにたいし、少年は二十人と書いている。

そのいずれが正しいのか我々は判定することはできない。しかし切支丹時代、日本に渡った宣教師のなかには自分の労苦や業績を誇るためにも改宗者の人数を誇大にのべる者もおり、アマチにこの記録を書かせこれら使節と日本人の通訳をつとめたソテロという神父は姉崎博士の言葉をそのまま借りるならば誇大妄想の気味があったから、二十人の受洗者を三倍以上にのべたとも考えられぬことはない。もしそうとするとアマチの記録は正確な資料としてではなく、かなり警戒して読まねばならぬ。だが今日までの遣欧使節の研究家はすべてこの記録を鵜呑みにして、それを疑っていないように見える。

私はメキシコ滞在中、この首都に住み、支倉常長について研究し、彼についてスペイン語による本も書いた大泉光一氏と知りあった。そして氏から奇妙な話を聞かされた。

いかなる教会にもそれぞれの年の受洗者の名簿は保存されている。そこで大泉氏は日本人たちが受洗した聖フランシスコ教会の一六一四年の名簿を調べてみた。ところがそこには日本人の名は一人も書かれていなかった。ごく少数の者たちの名ならば記載洩れと言うこともあるが、七十八人の日本人受洗者の名が歯がぬけたように消滅することはありえない。大泉氏が茫然としたの

も無理もない。

氏の調査が正しいなら、そこには二つの理由しかない。ひとつは教会が日本人の受洗者の名簿を別に作り、それが失われたのか、あるいはアマチの記録はまったくの嘘で日本人たちは洗礼を一人も受けなかったか、である。

いずれにせよ、後世の我々には事実をたしかめる方法は今ない。そしてたとえアマチの日本人受洗の報告が事実としても、その洗礼の動機についての文章は疑わしいのである。彼はこれら日本人たちがメキシコ市における聖週間の行事に感動し、市民の熱烈な信仰にうたれて改宗を願ったとのべている。しかし日本人がたったそれだけの一時的感情で祖先伝来の仏教を棄て基督教に帰依するだろうか。まして当時は既に日本では江戸幕府が切支丹を弾圧しはじめていた。そうした事情を熟知している日本人がたんなる一時的な感動だけで受洗するとは考えられないのだ。

私の想像では、使節と旅を共にした日本人たちは（その大部分はメキシコとの貿易を求める商人たちだったので）この国における自分たちの取引きを有利にするため基督教徒であった方が得だと思ったのであろう。それは改宗した初期の切支丹大名にも見られる現象であって、彼等は南蛮船が運ぶ武器・弾薬をえたいために洗礼を受けたのである。同じようにこのメキシコの日本人も「利のために」神を利用したのではなかろうか。しかしアマチは毫もその動機を疑っていない。

長々とこのような瑣末なことにこだわるのは近頃、伝記を書く仕事をはじめているからである。この三、四年、私は自分の人生と重りあうような人物の伝記を書こうと試みてきた。そしてそのたびごとに伝記を書くことのむつかしさをほとほと感じたのである。

その最初の困難はその人物についての資料が信頼できるか、どうかという問題である。普通、学者たちは信憑性のある資料としては当の人物と同じ時代のものを優位におき、後世のものを第二資料にする。同時代のものには当の人物を目撃し、あるいは共に語った人の話がある。それだけに真実を伝えていると考えるのは当然だろう。

しかし我々は小説家であるから、いかに我々が他人を知りえないかを人生の経験からも知りぬいている。同時代に生れ、その人物を見たり、その人物と語った人の書いたものは、かえってその人の主観や偏見がまじることも知っている。アマチは支倉常長と同行した人物である。しかしその記録にさえ、疑わしい部分と彼自身の主観による記述のあったことは今、のべた通りである。おそらくアマチは決して嘘を書くつもりはなかったのであろう。彼は日本人たちが本心から感動して洗礼を受けたと信じていたのであろう。したがってその彼が日本人たちが聖週間の行事とメキシコ市民の熱烈な信仰心に感動して受洗したと書く時は、彼にとっては嘘ではない。嘘ではないが、真実をつかめなかったのである。

このことは我々に次のことを考えさせる。我々が他人を知ろうとする時は、必ず自分に理解しやすいような秩序づけを意識的、無意識的にすると言うことだ。意識的にする例は二流批評家の

作家論である。無意識にするのは我々の現実生活である。ある人物の生涯を語り、ある人物の肖像を描くために一番やさしい方法は、当の人物を知らず知らずのうちに単純化してしまう「秩序づけ」の方法である。そして私が今、関心をもっている伝記、もしくは伝記文学の一番、容易な手法もこの「秩序づけ」方法だ。アマチは熱烈な基督教信者だったから、彼は記録を書きながら遠い東洋の島国から来た日本人たちが次第に基督教にふれ、神の子となることを願っていた。その無意識の希望が彼の記録の秩序づけをしてしまったのであろう。七十八人の受洗者の洗礼の動機の記述がその秩序づけを示している。

伝記を書く者もアマチと同様、この秩序づけの欲望から離れられない。そのくせ彼は実人生の経験から人が他人を知ることが、どんなに不可能に近いかも知っているのだ。

我々が死んだあと、この地上に残す自分の存在とはすべて他人の見た自分である。ある人は我我をいい奴だと思い、他の人はイヤな男だと思っている。別の者には嘘つきと考えられ、更に正直だったと懐しがってくれる人もいる。そうした他人の眼にうつったすべてのイメージの集積が死後の我々の存在になってしまう。だがそれら他人の眼を通したイメージの集積がつくりあげた自分の姿――、その姿をもし我々が墓のなかで知ったとしたならば、どうだろう。我々はきっとこう叫ぶにちがいない、「自分はそれだけではない。自分にはもっと別のXがあった筈だ」

実人生からこの他人を知ることの不可能に近いむつかしさを知っている作家は伝記を書く時ひとつの矛盾にぶつかってしまう。ある人物の伝記を書くということはその人物の人生に秩序を与

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com